

連載小説『痴れ者よ』

【おもな登場人物】

○山崎耕作やまざきこうさく

・一九一三年生まれ。出版社「暁書房」の責任者。戦時中は上海の病院で勤務し、引揚後は有楽町で浮浪者同然の暮しをしていたが、川上一と出会ったことではかたがたの夢であったエロ雑誌の創刊を目指している。見事な白髪が特徴。天性の閃く力を持つている。川上からは「コーさん」と呼ばれている。

○川上一かわかみはじめ

・山崎より五歳年下の小柄な青年。分厚いレンズの眼鏡がトレードマーク。戦時中は大日本産業報国会で働いており、現在は山崎とともに暁書房でエロ雑誌創刊のために動いている。長年培った交渉能力と出版業界に関する知識が武器。

○南原梅雨なんばらばいう

・山崎がエロ雑誌を創刊するきっかけとなった雑誌『ぱらいそ』の出版者。エロ・グロ・ナンセンスの時代に何度も発禁処分を食らい、「天下の猥出版狂」と称された。現在は消息不明。

○村岡武むらおかたけし

・大日本産業報国会で川上の上司だった男。学生時代に柔道で鍛えた屈強な体の持ち主。すでに山崎たちがいるアパートからは去っている。

○江戸川乱歩えどがわらんぽ

・言わずと知れた日本推理小説の大家。南原梅雨とともに昭和初期の出版界を支えた。山崎のために知人 水野竜の原稿を渡した。人並外れた推理力を持つ。口癖は「かね?」。

○尾津喜之助おづきのすけ

・関東最大の闇市「新宿マーケット」を支配する屋系暴力団「関東尾津組」の組長。黒の着物に黒の羽織をまとった精悍な男。部下にも銃口を向ける凶暴性を持つ。

【前回までのあらすじ】

上海の軍病院で働く山崎耕作は、偶然見つけたエロ雑誌『ばらいそ』に感銘を受け、引揚後は川上一とともにエロ雑誌の創刊を夢見ていた。

二人は村岡武の助言で、まずは試しにエロ小説を出版してGHQの検閲の状況を探ることに決めた。江戸川乱歩が所有していた亡き作家水野竜『あかつき草紙』の原稿を手に入れたのち、なんとか印刷費と印刷所を確保。刷り上がった本を手にした二人は、その題名から「暁書房」という出版者を設立。さっそく本屋を渡り歩いて『あかつき草紙』を売りに出かけた。

その後山崎と川上は、川上の恩人である本屋の店主のアドバイスに従い、新宿マーケットで本を売ることに。山崎が機転をきかせて瞬く間に在庫をすべて売りつくすも、帰り道に関東尾津組の組員に囲まれる。二人は誓約書を書かずに無許可で商売をしていたのだった。万事休すと思われたそ

のとき、一発の銃声とともに現れたのは、
関東尾津組の長、尾津喜之助であった。

痴れ者よ

第三回「変人結社 暁書房」

市川司幸

挿絵…穂空恵雪

時に時代は俠客を求める。

江戸時代の幡随院長兵衛、国定忠治。幕末の新門辰五郎。明治の清水次郎長。戦前の吉田磯吉。そして戦後、またひとりの俠客が袖で風を切っていた。

生まれは東京本所相生町。性は尾津、名は喜之助。

砂利の頃から喧嘩の名人として知られ、十七歳で不良集団の長として浅草で抗争を起こすなど、喧嘩っ早い性格ではあるものの、実践の中で組織統率の力を磨いていた。

そもそも尾津一族のルーツは水戸にある。水戸は江戸時代より勤王思想の源として多くの活動家を輩出。幕末にそのエネルギーが爆発して「桜田門外の変」を起こすことになるのだが、尾津喜之助のエネルギーもまた、水戸藩士由来のものであるかもしれない。

大正末期に尾津は右翼集団「皇国決心団」を創設。これは当時流行の社会主義への反発から生まれたものだが、のちに尾津は団を率い、摂政宮(のちの昭和天皇)の護衛を

傷つけたブラジル公使に復讐するべく殴り込みに向かっている。かと思えば、同時

並行で不動産ブローカー業にも手を出して商才も発揮し始める。もし彼が暴力を知らぬ人間だったならば、巧みな商人として時代の先頭に立っただろうが、あくまで彼は俠客。

昭和に入り、尾津は新宿の地に的屋系暴力団「関東尾津組」を結成。そのナワバリは新宿だけでなく、中野、麴町、赤坂、渋谷、世田谷、八王子、川越まで及び、急速に勢力を拡大していった。

ときに事件も起きた。一九三二年、喜之助は殺人教唆の罪で牢屋に放り込まれたが、それは上下関係を無視した部下を処罰するためであった。しかし喜之助は己の罪を悔い、ひたすら牢獄では読書を通じて人格修養に励んだといわれている。

その後、関東尾津組は戦前・戦後を新宿とともに生きていった。市民のために防空壕を掘り、空襲で街が焦土と化せば炊き出しと区画整理。物資がなければ商売をやり、市民の信頼を集めた。すでに喧嘩っ早い小

僧は、立派な一人の侠客として大成していた。

そして終戦。何もかもが焼け落ちた中、新宿最大の暴力団の長、喜之助は敗戦後真っ先に宣言した。

新宿露店再開御挨拶

終戦ラッパの響きと共に、街を明るく便利にすべく、「買ふ身になって売る露店」建設を志し、新宿街頭に平和の新発足を致す事と相成りました。然乍ら、物資不足の折柄、何卒皆様の「露店」として、よりよき御指導御鞭撻を賜ります様切に懇願申上げて、帝都復興に魁ける露店再開の御挨拶に替へます。

この宣言ののち、喜之助率いる関東尾津組は関東最大の闇市「新宿マーケット」を立ち上げた。その過程については前の稿ですでに書いたので省略する。

新宿マーケットはその後数年間新宿の商業を一手に担い、一九四八年に解体されるまで新宿の発展を支えた。喜之助が蒔

た種は着々と育ち、現在の新宿駅東口一帯の隆盛につながっていく。

さて、話を戻そう。

「関東尾津組組長、尾津喜之助です」

壮年の男は吸い殻を煙草盆に置くとそう呟いた。

喜之助、齢四十八。穏やかな表情だ。

もちろん山崎と川上は、目の前の男が先述のような波乱の人生を送ってきたことなど知る由もない。だが、その穏やかな顔のなかの双眸が、鋭利な刃物のように自分たちの顔に向けられていることに気付いている。

（こいつ、ただもんじゃない）

山崎も野生の勘でそれを悟っていた。

「山崎耕作です」

「か、川上一と言います。」

「ん、山崎さんに川上さんか。それで、今日はいったいどんな御用でいらっしゃったんだい」

山崎が喜之助の背後の組員に視線をやると、喜之助もそのほうへ顔を向けた。組員はさっきまでの威勢を失い、舌を噛みそ

うになりながら

「こ、こいつらはうちのシマで勝手に商売をしていたんです」

と言った。

「そうかい。だがそんなことはよくあることじゃねえか。うちのシマは広い。迷い込む子犬の一匹や二匹、いつだっているもんさ。誓約書を書いてもらって、それで済む話じゃないのかい。どうして後ろ手に縛って殴る必要がある」

「しかし、こいつら誓約書にサインをしないんですよ。罰金が高い、それに場所代を取り立てるなんておかしいって言いやがるんです。だから——」

組員が言い終わるより先に、彼の手の甲に煙草の吸殻が押し付けられた。さっきまで火が点いていた吸い殻である。ジュツと音がし、組員は短い叫び声をあげた。

「おれは何回も言っている。娑婆のやつらに手を出すな、と。いいか、俺たちはあくまでこの土地をお借りして商売をやっているんだ。本来は娑婆の人間にはいくら礼を言っても足りねえ身分なんだ。もし誰か

が『尾津組のやつに顔を殴られた』と言いつらしてみろ、おれたちは信頼を失って即刻新宿を立ち退かなきゃいけない。お前の馬鹿な行動のせいで組全体が明日のおまんまに苦労するんだ。考えて行動しろ」

組員は火傷した手をかばいながら、喜之助に頭を下げた。

「さて、と」

ちょうど机の上に誓約書が一枚乗っていた。さきほど組員が山崎たちに書かせようとしたものである。喜之助はそれを指でつまむと、書面を山崎に見せた。

「あんちゃんはこの誓約書が気に食わないって言うんだな」

喜之助は笑っている。まるで老爺が孫をあやすときのように。

「いったい、この書類のどこが気に食わないんだ」

喜之助と山崎の視線がかちちりと噛み合った。いつ火の粉が飛び出すかわからない。すぐ傍で見ている川上さえ、もし自分が山崎だったらどのような言葉を使えば生きて帰れるのか想像がつかなかった。も

し言葉の選択を誤れば、喜之助の拳銃が再び火を噴くだろう。

しかし山崎は、何も言わなかった。

喜之助の手から書類を取り自分の前に引き寄せる。そしてちょうど傍にあった舶来の万年筆をとると、書面の支払いのくだりを黒い線で消していった。関東尾津組入会費、組合費、支部費……一文、一文、塗りつぶされていく。そして最後の「その他(場所代)要相談」まで線を引き終わると、最後に一言

「市場荒らしにつき罰金十九円」

と書き足した。

「これです」

山崎は喜之助に書類を返した。

壮年の侠客は書面に目を通すと、口端をわずかに上げた。

「罰は罰としてきっちり受けるが、あくまで雑費にはびた一文金を出さない、というわけだな？」

「ええ。俺たちが関東尾津組さんのナワバリで勝手に商売をやったのは間違いありません。然るべき金を払ってお詫びしな

きやいけないことです。しかしその他の金については出す気がありません。そもそも闇市というのは、生活に困窮した人々がわずかな金を持って明日の糧を買う、もしくは売る。そういう場所でしょう。それなのに、ただ場所を貸してやっているというだけで何の関わりもないやくざに金を出さなきゃいけないなんて、ちゃんちゃらおかしい。それは弱い者いじめじゃないんですか。俺は日本に帰ってきてからしばらくシケモク拾いをして暮らしていた。だから闇市についてはある程度知っている。着の身着のままの人々がぺこぺこしながらやくざに金を出さなきゃいけない闇市なんか、見たことも聞いたこともありませんよ」

山崎は先ほど組員に言ったのとほとんど同じ文句を喜之助にぶつけた。一言目が出れば言葉はするすると口から飛び出たが、言い終わるとたちまち心臓の鼓動が大きくなった。

(俺は殺されるかもわからない)

そうも思った。だが不思議なことに、今ここで尾津組組長に脳天を撃ち抜かれて

も後悔は残らないような気がした。言うべきことを言った、ということだろう。

一方の喜之助は、終始鷹の目のように山崎を捉えていたが、話し終わると卓上の緑茶を飲み干した。そして懐から、さきほど事務所の扉を貫いた拳銃を出して机に置いた。

「至極真つ当な意見だな」

喜之助はぼつりと言った。

背後の組員の目が大きく開いた。その周りの組員も驚きの表情である。やくぎの組長が、やくぎを批判する言葉を認めてしまったのだ。部下たちははつきり組長が何かしらの反駁をするものだと、もしくは懐から取り出した拳銃で脅すくらいのことをするものだと思っていたのだ。

しかし喜之助はひとり、落ち着いている。「こっちの事情になるがね、おれたち関東尾津組はご覧のように事務所を構えて、この新宿マーケットの支配者のような面をしているが、実のところおれたちはここで商売をする権利は何ら持ち合わせていないのさ。この土地だって元々は人様の土地、

それをおれが淀橋警察署のやつに頭を下げて使わせてもらってんのさ。それに売り物だって、合法じゃねえ。全部非合法、ヤミの商品だ。警察がおれたちを捕まえようと思えばすぐに捕まえられる。関東尾津組はあんちゃんの言う通り、悪党さ。ただでさえ金のない人間から無理やり金をとる、泥棒稼業よ。あんちゃんの言っていることは何も間違っちゃいねえ。正論さ、そして正義だ。あんちゃんは正義の味方だ」

だがな、と喜之助はこぼした。事務所の外から言葉の溶けた人間の声が聞こえた。ひどく酔っぱらっているのだろう。

「正義の味方にやこの街は守れねえよ」

人々は喜之助の口調が変わったのに気づいた。

「あんちゃんは新橋の闇市は知ってるかい」

「行ったことはありませんが」

「あそこはもう、日本人の街じゃないよ。華僑に奪われちゃってる。今最も勢いがあるのはおれたち関東尾津組でも日本政府でもなく華僑の連中だ。あいつらは莫大な

資金と戦勝国の特権を持つてる。最近じゃやつら、新橋一帯を支配して闇市を作りやがった。おれの知り合いの松田(注①)がじきにあいつらと闘いをするって意気込んでたが、どうなるかわからねえ。いいか、おれたち日本人は敗戦国の国民なんだ。おとなしくしていたらアメリカや中国に土地や金を奪われる一方なのさ。おれは昔から新宿の世話になってる。だからおれはこの街を守るし、これからもここで商売をする。そのためには金と武力が必要だ。平和や良心は糞ほどの役にも立たねえ。おれたちが商人から金を取り立てれば、おれたちは鉄砲やダンピラを買って支那人どもを追っ払える。誓約書を書かせれば、事前によつらを排除することができる。制度や取り決めには全部理由があるのよ。だからあんちゃんみたいに誓約書を書かねえって言うてみたり、金を取り立てるなど喚びたりするのを大人しく聞いているわけにはいかねえ。もし反抗するってなら——」

喜之助は机に置いた拳銃をさつと掴むと、山崎の眉間に銃口を押し付けた。指は



引き金にかけられている。あと少し力を入れれば、たちまち拳銃は火を噴き、山崎の頭蓋は粉碎されるだろう。

ここまでなんとか冷静さを保っていた山崎も、目を大きく見開いて身動きがとれなくなってしまう。川上にいたつては恐怖のあまり椅子から転げ落ちていく。

「わかつてくれるかい、あんちゃん」

低く、奥の見えない声で喜之助は言った。

この声が、喜之助の腹の中の声なのだろう。野生の虎は獲物に飛び掛かる前に唸り声を出して身動きを取れなくするというが、喜之助の声はまさにそれであった。

山崎は自然とうなずいていた。生物としての本能が首を縦に振らせていた。

山崎は尾津に促され、誓約書にサインをした。納めるべき金の三十円と、罰金の十九円をきつちりと納め、最後に川上と並んで地に頭をつけた。

「盗みを働いたわけでもないのに頭下げるんじゃないよ」

喜之助は二人の頭を上げさせた。

売り上げの半分を失った二人が事務所

をあとにしようとすると、

「そういえばあんちゃんたち、うちのシマで何を売っていたんだい」

と尋ねた。

「エロ小説を売っていました」

「ちよつと見せてくれねえか」

喜之助は『あかつき草紙』をばらばらとめくった。

「エロ小説っていうから下らないかと思つたが、案外よくできてんだな。おれは昔刑務所にいた頃さんざん本は読んだが、これはなかなかやる。この小説はあんちゃんたちが書いたのかい」

「いいえ、江戸川乱歩先生からお借りした、先生のお知り合いの作家の原稿です」

「江戸川乱歩……、ああ、『二銭銅貨』の人か。へえ、江戸川乱歩にねえ。なあ、また今度も何か本を出すのかい」

「はい、今度はエロ雑誌を出そうと思つています。その小説も、雑誌を出すための前段階として出したものです」

「そうか。それならあんちゃんたち、おれからひとつ宿題を出してやるよ。もしそれ

ができれば、マーケットでいちばん人通りが多い、駅前の土地を貸してやる。ただし、できなかったら、あんちゃんたちにはいっばん人通りの少ない場所しか貸してやれねえ」

駅前の土地といえば、新宿マーケットの玄関口のようなもので、マーケットを訪れる者はまずここを通る。そこに店を出せれば、雑誌を買う人が増えるのは間違いない。露天商としてこれ以上ない誘い文句である。もちろん山崎と川上も飛びついた。

「それで、その宿題とは……？」

「そうだな、そのエロ雑誌に偉い作家や画家、もしくは写真家を使え。おれでも知っているような人じゃなきゃだめだ。この新宿マーケットは、品物は質の良いものを、というのが基本さ。エロ雑誌だつて、まるでこれらの三文小説家が書いたような文章を載せているようじゃ品物と認められねえ。どうする？ 生半可なことじゃねえぞ。やるのか？ やめるか？」

尾津の誘いは一種賭けであった。

たしかに偉い作家を雇うことができ

ば、暁書房は良い市場をも手に入れることができる。しかし暁書房はまだ出来たばかりの赤子会社である。そんな会社の、しかもエロ雑誌に有名な作家が文章や絵を寄越すだろうか。

現実主義者で出版界の厳しさを知っている川上は渋ったが、そんなことを知らない隣の山崎はすぐに飛びついた。

「やるに決まっているじゃないですか」
偉い作家なんてすぐに見つかるだろう、なんせ江戸川乱歩から原稿を借りることができたのだから、というのが彼の考えであった。

「よし、やってみろ」
喜之助は顔を崩さずに二人を送り出した。

二人が出ていくまで誰一人として声を上げる者はいなかったが、扉がぱたんと閉まると一人の組員が

「どうしてあの二人に一等地をやることにしたんですか。どこの馬の骨かもわからない、しかも平然とうちに反抗してくるようなやつらですよ」

と尋ねた。普段は組長の命令があればその通りに手を動かし足を動かす彼らでも、さきほどの喜之助の言葉には疑問を感じたらしい。

間もなく五十歳になろうとする壮年の男は平然と煙草を一服呑みこみ、それからいたずらを企む悪戯鬼のような顔で

「馬鹿を泳がせておけば思ってもみなかった場所に流れ着くものさ。根性なしだつたらすぐ沈む。お前らも楽しみにしていな」と言った。

男もまた、若き日を馬鹿者として生きてきた。

しかし困ったのは川上である。
「どうしてあんな無茶な取り決めをするのさ！」

有楽町のアパート、今は大家の許可を得て「暁書房本社」となった建物の一室で、川上は牛乳瓶の蓋のような眼鏡がこぼれそうな勢いで山崎を怒鳴りつけた。

「どうしてって、あんな好機は他にないだろ。有名な作家をひとり雇えれば新宿マー

ケットのいちばんいい場所を使えるんだぜ。乗るしかないだろ」

「そんな軽く言うけど、有名な作家を雇うって大変なんだよ！ コーさんは知らないだろうけど、名のある作家を引き込むには沢山のお金と時間とコネが必要なんだよ。平井先生のときはたまたま上手くいったけど、うちみたいな小さい会社の、しかもまだ創刊すらしていないエロ雑誌に寄稿をお願いするのはほとんど不可能なことなんだからね。というかコーさんは、誰か目星がついているの」

山崎は頬をぼりぼり掻きむしり、
「そうねえ、エロだったら谷崎潤一郎とかどうよ。あの人そういうの好きじゃない？」
と言った。

川上は啞然とした。
谷崎潤一郎といえば志賀直哉とともに当時の文壇の頂点に位置する大家である。彼に寄稿を依頼するのは大手の文芸誌ばかりである。しかも谷崎はこの頃京都に住んでおり、人の出入りを極力減らして大長編の執筆に取り組んでいるとの噂である。

東京から関西まで行き来するだけでも骨の折れる仕事だ。

「谷崎先生は無理だよ。コーさんはもう一会社の社長なんだから、ああやって先を見ない行動をするのはやめてよね」

山崎の部屋には三月の穏やかな日の光がさらさらと流れ込んでいた。その陽気が山崎の心を不自然なほど落ち着かせているらしい。

「まあ、とりあえず『あかつき草紙』がどう転ぶかを見なけりやどうすることもできんわな」

『あかつき草紙』がどれほどの反響を呼ぶか、というのは暁書房にとって大きな問題であった。本が売れなければエロ雑誌出版の資金が生まれないのはもちろんのこと、謎多きGHQの検閲が『あかつき草紙』に作動するかどうかで今後の出版計画が大きく変わるのである。もし万が一検閲に引っかかったらエロ雑誌創刊すら怪しくなってくる。

実験の結果が出始めたのは一九四六年三月の中旬頃だった。

本を売りに行った書店のひとつが、『あかつき草紙』完売の連絡を送ってきたのである。封筒の中には一通の手紙が入っており、予想外の人気のため二週間ほどで本が売れてしまい、可能であれば第二版を願いたい、と書かれていた。

同様の手紙が五通来た。電報が一本。そのほか、読者からの手紙が十一人から送られてきた。そのうちの九通が作品の内容を称賛するもので、残りの二通は、あんな猥褻な書物を販売するなという抗議の手紙であった。いくら江戸川乱歩が認めた小説とはいえ、中には濡れ場が三回描かれている。抗議の手紙が来ても何らおかしくない。しかし、こうした反響は山崎と川上にとって嬉しいものであった。自分たちが出した本が書店と読者に受け入れられた嬉しさと、一部の読者の反感を招くだけの猥褻さがあったことへの安堵があった。そのうちに売り上げも集まり始め、どうやら『あかつき草紙』の売り上げは生まれたての出版社にしては破格のものであることが見え始めた。

そして不安だった検閲に関しては、出版から一か月が経過しても何の音沙汰もなかった。無名の出版社の本ではあるが売れ具合はそこの大手の出版社の本と遜色ないし、抗議が来るくらいのエロを含んでいるのだから、まさかGHQの検閲局が『あかつき草紙』の存在を見逃しているわけがなかった。つまり、GHQはこの程度のエロを容認したということである。

四月になった。
「ハジメちゃん、もうそろそろ動き出してもいいよな」

山崎が言うと、川上は頷いた。
「ついにエロ雑誌の創刊に向けて動けるね。お金も十分に入ってきたし、印刷所の佐川さんとも話をつけてある。まず最初にやるべきことは、社員二人だけの状況をどうにかすること。それから例の有名作家をどうするかってこと」

暁書房の社員はいまだに山崎と川上の二人だけである。『あかつき草紙』の出版のときは作業を分担してなんとかしたが、雑誌を出すとなるとある程度の人員が

必要になる。会社の拡張が最初の仕事であった。

「最低でも、俺たち含め五人は必要だな」

そのとき、山崎の部屋のドアが叩かれた。

「ごめんなさいね、入りますよ」

部屋に入ってきたのはアパートの大家の谷マサ子だった。今年四十五歳になる肉付きの良い女で、川上が産報に入社したときからアパートを経営している。川上にとっては第二の母親のような存在であった。以前山崎がアパートを暁書房の本社にしてもいいか相談に行ったところ、マサ子は一切悩むこともなく

「使いな使いな！ あんたたちがいなくなっちゃったら私はアパートを畳まなきゃいけないからね。どんどん社員を呼んでちょうだいよ」

と言った。マサ子は若い頃から数多の職業を転々としてきた苦勞人で、そのせいか性格がからりとしていて決断力があるのである。

「また郵便屋さんが手紙を持ってきたよ。ええと、一通は本屋さんで、もう一通は村岡武……ああ、たけちゃんからだね。懐かしいね、元気にしているのかしら」

村岡武は以前アパートに住んでいた体格の良い男で、産報時代の川上の先輩にあたる。山崎はアパートにやってきた次の日に村岡と会っており、間もなく引越越していった。

川上は手紙を広げた。

「へえ、村岡さん、新聞社に入ったんだって。新日本新聞社……小さい新聞社っぽいね」

「新聞社かあ、村岡さんのことだから立派にやっているんだろなあ。あ、そうそうおぼちゃん、俺たちそろそろエロ雑誌の創刊に向けて新しい社員を募集しようかなって思ってるんだけど、社員はこのアパートに住まわせちゃっていいかな」

マサ子は

「いいよ、呼びな呼びな。部屋は十四もあるからね、よほど多くなければ住めるはずだよ」

と、まん丸の顔で笑った。

「とりあえず社員の住居は確保できたわ

けだ。だが住む社員をどうやって募集するかだよな。一枚一枚張り紙を貼るのいいかもしれないけど、いちばんはやっぱり広告を出すことだよな。でも俺たちみたいな小っちゃい会社の求人載せる新聞があるかねえ」

山崎がふと視線を床に向けると、そこには村岡からの手紙。

「あ、村岡さんの新聞社……」

早速山崎は川上を新聞社に派遣した。

新日本新聞社は川上の想像よりも大きな新聞社であった。大手の新聞社には敵わないまでも、一応東京全域に読者を獲得しているらしく、本社の建物は出来立てのコンクリート造りであった。

村岡武は産報時代の経験をかわれ、編集部に所属していた。川上は先輩と久しぶりの対面を果たし、早速暁書房の求人広告を出せないか相談した。

「おう、いいぞ。もし広告の原稿が出来たら送ってくれ」

村岡は二つ返事で承諾した。変わらず筋骨隆々な背中が嬉しそうに揺れていた。

こうして四月二十日、新日本新聞社朝刊。広告欄に暁書房の求人載った。

人材求む

日本の夜明けを告げる暁書房

猥褻雑誌創刊に付き急遽社員募集

天才作家、天才画家、天才編集者探して
います

連絡は東京都有楽町〇〇ー××

暁書房本社ビルヂング

「天才作家、天才画家、天才編集者募集とは大きく出ましたね」

刷り上がった新聞を広げながら川上が言う。傍では山崎がコッペパンにかじりついている。

「だってそうしないと有名な作家が来ねえじゃんか」

「まあ、それはそうかもしれないけど。いや、でも広告を出したくらいで本当に天才が見つかるものかなあ」

川上は「三顧の礼」の故事を思い出した。三国鼎立時代の中国、かの劉備玄徳が「臥

せる竜」諸葛亮公明を自軍に引き入れるために三度彼のもとを訪れて頭を下げたという、あの有名な話である。

川上は思う。たしかに山崎は何か常人にはないものを持っている。発想力、行動力、胆力、どれも川上が持ち合わせていないものである。だが山崎は統率者としては少々考えが粗い。今回の件も然りだが、彼が最もそれを感じたのは尾津組事務所にいたときであった。あのとき冷静沈着な尾津喜之助が登場したから何とかなったものの、もしあのまま山崎が組員に突っかかり続けていたら、大怪我は免れなかつただろう。（コーさんは前のめりになりすぎて足元の石に躓きかねない）

劉備玄徳には関羽という忠臣がいた。知力があり、怪力を誇り、幾度となく義兄を助けた。川上は軍略の才も薙刀の腕もない。だが、経験とある程度の知識、それから常識がある。

（僕がコーさんを支えないと）

翌日、川上はひとりアパートを出て行った。

山崎には

「印刷所ともう少し話を詰めてくる」

と言っておいたが、目的は別にあった。

彼が向かったのは、豊島区の江戸川乱歩邸であった。

以前原稿を借りに来たときは雪が降っていたのを覚えている。だが四月にもなるど陽気な天候で、敷地の塀にはたんぼぼが風の中で綿毛をくずしていた。

川上が家の戸を叩くと、あのお手伝いが出てきた。

「あ、あなたはこの前の」

「こんにちは、出版社暁書房の川上です。江戸川乱歩先生は今いらっしゃいますか」

「ええ、今ちょうど土蔵へ調べものに出て行ったところでございます。何かご用事ですか。私と呼んでまいりますので、客間でお待ちください」

「あ、いや大丈夫です。先生は土蔵にいらっしゃるんですね？」

川上は頭をさげて土蔵へ歩いて行った。扉を三度叩くと、中から「どなたかね」と声がした。

「以前お世話になった川上です。エロ雑誌の川上です」

「ああ、入りなさい」

と返事が来たので、川上はひとり土蔵に踏み込んだ。入ってすぐの階段を上り、蔵を埋め尽くす書棚の森を通り抜けると、窓際の机に禿頭の男が背中を丸めていた。江戸川乱歩である。

「お久しぶりです、川上です」

乱歩は眼鏡をかけ直すと川上に椅子を勧めた。

「以前先生にお借りした水野竜先生の『あかつき草紙』、おかげさまで売り上げは好調です」

「そうかね。それはよかった。アメリカから何か言われたかね？」

「いえ、今のところは何も」

「ではいよいよ例の雑誌を出すというわけか。猥雑誌を」

「はい、今準備をしているところです」

「で、私に原稿を依頼しようということでは今日は来たわけだね」

相変わらずこの人は他人が言おうとしている言葉を先に言うな、と川上は思ったが、乱歩の推理力は前回体験済みだった。今更驚くほどのことでもない。川上は口調を崩さず

「はい。『あかつき草紙』が売れましたが私たちはまだ無数の新進出版社のなかの一匹に過ぎません。もし先生が作品を寄稿してくださいれば、こちらとしてはとても良い宣伝になります。もちろん原稿料は他の出版社に負けない額をお支払いいたします。ご検討いただけないでしょうか」と言った。

川上の考えは、いっそのこと雑誌創刊まで江戸川乱歩の助けを借りようということなのであった。以前の訪問で乱歩はエロ雑誌創刊に興味深そうな表情をしていた。乱歩自身エロ・グロ・ナンセンス時代の作家だから、川上たちの思惑には共感するところがあるようだった。別の作家と一から交渉をするよりも、いっそのこと乱歩と交渉をしたほうが近道だろうと川上は考えたのである。

乱歩は右手で顎を掴んで、下を向いた。考えている。川上はその手が離れ、乱歩の口から「わかった」という一言が出るのを期待した。

だが乱歩はついに言わなかった。

「私は君たちの計画には面白みを感じている。できることならば私も君たちの仕事を助けたいと心から思っている。しかし、今回ばかりはできない」

「どうしてですか」

「……これは私の事情なのだが、このところ良い小説のアイデアが出ないのだ。戦時中はあれほど検閲が憎く、一秒でも早くそれらから解き放たれて自由に小説を書きたいと思っていたのだが、いざ戦争が終わってみると、今度は何を書いたらいいのかわからないのだ。私の友人の船橋聖一君も同じようなことを言っていた。人間は突然自由を手に入れると持て余してしまうようなのだ。そのせいか最近の私は納得する小説が書けない。なんとか短い読み物を書いてはいるが、君たちの創刊号を飾るようなものは書けそうにない。だからお断り

したい」

そういうこともあるのか、と川上は思ったが、彼にとつては乱歩の作品を寄稿してもらうことがいちばんの目的であり、寄稿された作品が上手いとか、拙いとかは二次なのである。暁書房に必要なのは「推理小説の大家、江戸川乱歩先生が作品を載せた」という事実だった。

川上としては退くわけにいかない。

「いえ、乱歩先生の作品の評判は戦後も変わっておりません。私はもちろん作品を拝読していますが、ぜひあのようなものを私どもの雑誌にも載せてほしいのです」

いっそう調子を強めた。

川上は『あかつき草紙』の出版準備をするのと同時並行で、東京中の文芸雑誌の動向を把握していた。どの雑誌に誰が作品を載せているか。物語の筋、世間の評価、そして個人の感想を手帳にまとめ、今後作家と交渉をすることになったときの資料にしようと思っていたのである。もちろん乱歩の作品も追っており、川上は悪くない評価を下していた。万が一乱歩に

「私の作品の何を知っているのだ！」

と言われても、言い返せるだけのものを持つている。

ところが乱歩は、

「それでも出せない」

と言うばかり。

その後川上がいくら押し込んで、乱歩は「出せない」の一点張りだった。次第に川上の心に焦りと苛立ちが積もっていった。川上にとつては乱歩が雑誌創刊の鍵だった。なんとしてもこの交渉を上手く運びたい。

だが、その焦りが川上の本音を口からこぼした。

「私たちは先生の作品を掲載できればそれでいいんです！」

乱歩のやや垂れた頬が小さく反応した。

川上は言った後で「あっ」と思った。取り消そうと思ったが、一度飛び出した言葉を取り消すことは誰にもできない。

「なるほど、私と君とでは考え方が根本から違っていたみたいだね。私は君たちの雑誌がより良い方向に向かうよう考えてい

たのだが、君の今の言葉を聞く限り、君は雑誌の質云々よりも刊行できればいいと考えているみたいだ。違うかね？ 江戸川乱歩の作品を載せられればそれでいい、と君は内心で思っているということかね？」

探偵の厚い虫眼鏡が川上の心を覗き込んでいた。

川上は乱歩から強い言葉が放たれることを予感した。怒鳴ることなどしなさを温厚そうな顔が怒りの言葉をぶつけるのではないかと思った。

だが乱歩はふうっと長く息を吐いて、あくまで静かに言った。

「川上君、だったね。君はあの白髪の青年の親しい同僚なのかね？」

川上は「はい」と言った。二人は相棒同士の関係である。

「これは彼には秘密にしておいてほしいのだが、私は内心彼に期待をしているのだが、彼は私の古い友人に似ていてね。その友人は奇特な男でね、傍から見れば白痴の所業としか思えないことを平然とやってのけた。だが彼自身は痴人でも何でもなく、ま

るで子どもが木登りをしたり、積み木を積んだりするように、馬鹿騒ぎをやったのだ。あくまで私の直感だが、君の同僚はそれと同じような気質を持っているような気がするのだよ。もちろん私はただの他人、彼の本心など知る由もないが。しかし君は知っていなければならぬ。いちばん近くで仕事をする相手のことを何も知らない、というのは同僚としてあるまじきことだよ。少なくとも先ほどの君の言葉を、彼が受け入れるとは私は思えない。君はもう少し彼のことを理解しなさい」

川上は、黙ってうなずいた。乱歩の言葉が痛みを伴いながら喉に染みていくような気がした。それは怒鳴られるよりも、殴られるよりも痛かった。

「大変失礼いたしました。もう一度考え直してきます。今日は急な訪問申し訳ありませんでした」

川上は椅子から立ってその場を去ろうとした。

「待ちなさい。まだ話がある」

「話？」

川上が再び腰かけると、乱歩は

「せっかく足を運んでくれたのに手ぶらで帰すわけにもいくまい。さっき言ったように今の私の状態では君たちの雑誌に寄稿できないが、代わりにひとり知人を紹介しよう。ただし作家ではなく画家なのだ。表紙絵や挿絵を描かせれば天下一品、彼の絵を載せれば十分雑誌の格も上がると思うのだが」

「本当ですか！」

尾津喜之助は有名な作家だけでなく画家でもいいと言っていた。

「その画家は、いったい誰ですか」

「すこしここで待っていなさい」

乱歩は席を立つと、近くの本棚に梯子をかけ、その最上段から一冊の本を取り出した。

「これだこれだ」

乱歩が机の上に置いた本の表紙を見て、

川上は

「あ」

と思った。

題字は『ぼらいそ』とある。

乱歩は薄い雑誌のページをめくり、ふと手を止めて川上に広げて見せた。

それは何かの読み物の一ページだったが、大きく挿絵が載っていた。この挿絵が実に巧かった。明治時代の歌川派を思わせる筆遣いで、女性の姿が描かれている。ただただの美人画ではなかった。絵の中の女は全身を麻縄で縛られ、口からは赤い血を垂らし、無数のアオダイショウとともに桶の中に入れられていたのである。

「どうかね、凄いだらう」

「凄惨、なのに美しさも一緒にありますね」

「そうだ、それがこの画家の魅力だね。この絵を描いたのは井田清風いだけいふうという男だ。私よりいくつか年上の老人なのだが、エログロの時代にこうした絵を量産して悪名を馳せた。最近は駒込の動坂町で隠居同然の暮しをしていると聞くが、いまだに彼の絵を愛する者は多い。彼を引っ張り出せば、十分話題になるだろう。良ければ行ってみなさい」

「ありがとうございます！」

凌辱を受ける女を描く画家……。エロ雑誌の挿絵画家として十分すぎるインパクトを持っていた。川上は彼を暁書房に引き入れようと決意した。

乱歩は川上に井田清風の挿絵が載っている『ばらいそ』を渡した。

帰り際、乱歩は川上に一言、

「井田先生は非常に癖のある御仁だから気をつけたまえ」

と言った。川上はよく動く足で帰りを急いだ。

有楽町駅まで電車を使い、そこからアパートまで駆け足で帰っていると、建物の解体現場と出会った。巨大な建物は順調に崩されて、鉄骨だけが残されていた。

川上はこの建物について知っていた。相棒の山崎が彼と出会う前寝泊まりをしていたという劇場であった。山崎は劇場の前を通るたびに、劇場地下で浮浪者同然の生活をしてきたことを懐かしそうに語った。よく考えてみればまだ半年も経っていないのだが、ここ数か月の忙しさのせいで実

際よりも遠い過去に感じられるのだろうか」と、話を聞かされた川上は思った。

(もう二週間もすれば跡形もなくなるだろうなあ)

そう思いながら、つい川上は解体現場を眺めていた。感傷家の川上はこんなことでもついしみじみと感じ入ってしまうのだ。

(あの日僕はコーさんに付いていくと決めた。それはコーさんが夢中になって夢を語るのが素敵だったからだ。でも、コーさんはどのような思いでエロ雑誌を創刊しようと思っているんだろう。あとで訊いてみたいけれど)

「すみません」

後ろから肩を叩かれた。

振り返ると、青年が立っていた。まるで野良仕事でもするかのようなみすぼらしい格好で、大きな背嚢を背負い、履物は草履である。

あどけなさの残る顔つきの青年は、川上に一礼すると

「お、おらは小松五郎というもんでございます。え、えっとあなたは食料安定供給

事務局の方でございませうか？」

「食料安定供給事務局？」

「そうです。えっと、えっと」

小松と名乗る青年はしわしわのズボンから一枚の紙きれを取り出した。それは名刺であった。

——農林省食料安定供給事務局員

山崎耕作

そう書いてあった。

「な、なんですかこれ！」

「えっと、この前おらの村に来てくださった代議士さんがくれた名刺でございます。えへ、代議士さんはとても良い人で、おらが東京で代議士さんになりてえから弟子入りさせてくださいって言ったら、この名刺をくれたんです。『君の来訪を待っている』とも言ってくださいました。そんなので、栃木の村逃げ出して、汽車乗って、ここまで来たですよ」

青年は曇りのない目で喋る。

「あなたはこの山崎耕作さんのお仲間ですか？」

川上は訳がわからない。それも当然であ

る。この名刺は、以前『あかつき草紙』の出版費用を捻出するために山崎が田舎の米を買い付けて回ったときに使ったハツタリの名刺なのである。政府の役人だと偽れば安く米を買えるだろうという作戦であった。名刺の住所は今も解体されつつある劇場のものであった。これも山崎の嘘である。

「ちよつと……ちよつと待ってね。とりあえず、こんなところで話すのもあれだから、付いてきて」

「あ、ありがとうございますだ！」

川上は一先ず小松を連れてアパートに向かった。小松は事務局に案内されると信じ込んでいるらしく、わくわくしながら付いてくる。

「コーさん！」

外れるのではないかと思うほど勢よく部屋の扉を開けた。

「あ、おかえりハジメちゃん。夕方まで苦労だったね」

山崎は川上の後ろに見たことある男が立っているのを見つけた。

「コーさん、この人が誰か知っていますね？」

「お久しぶりです、山崎先生！ おらですよ、おら。覚えていますだか、栃木でお会いした農家のせがれ、小松五郎でございますよ！」

山崎はすべてを思い出した。

「あ、まづい」

そう思いながら。

一時間後、山崎の部屋では小松五郎が入社届けを書いていた。

「山崎先生、おら本当に先生と一緒に働けるですね！」

「先生って呼ぶのはいい加減やめてくれ。俺は代議士でも何でもないんだ」

「代議士さんじゃなくなつて、先生はおらの恩人です。これからは先生って呼ばせてください」

「僕もコーさんのこと、これから山崎先生って呼ぶからね」

「お前は普通に『コーさん』でいいだろう！」
小松五郎、十五歳。栃木の百姓小松家の

五男である。彼が住んでいた村は栃木の中でもとくに未開発な地域で、小松家もそんな農村の一農家に過ぎなかったが、父親は幼い五郎の枕元で、何度も夢の街東京について語った。

「いいか五郎。この村から山をいくつも越えると、東京っていうところに出る。東京は夢の街だべ。東京にはこの世のありとあらゆる旨いもん、綺麗なもん、まっさか可愛いおなごが揃つてる。いつかおめえも東京で代議士さんになれるといいなあ」

しかし現実はそのうすくいかない。五郎は六歳になると畑仕事の手伝いをさせられた。四人の兄も総動員して作物を作るのである。しかし折しも日本では農業恐慌の余波がまだ続いていた。小松家の作物はとくに多くが売れ残り、ひどい貧乏生活を強いられた。冬の燃料すら満足に買えないときがあった。それでも五郎は薄い煎餅布団にくるまりながら、

(おらはいつか東京の代議士になる)

と夢見続けていた。

あの日、「代議士」山崎に出会ったこと

はまさに天の恵みであった。五郎は家に帰ってから両親に山崎耕作という代議士に出会ったこと、すぐに東京へ旅立ちたいことを伝えたが、二人は真に受けなかった。「何をほざく。今おめえがいなくなったら、誰が大根の世話をする、誰が芋の世話をする。ばかみてえなこと言つてねえで、百姓はずっと野良仕事してればいいべや」

五郎は家出を決意した。四月のことである。

家の者が寝たのを見計らい、五郎はわずかな金と、生の芋が詰まった背嚢を背負い、単身山越えを敢行した。腹が減ったときは火を起こし、芋を焼いて食べ、二週間かけて栃木を脱出、そこからさらに二週間をかけて東京に辿り着いた。食料の生芋はもう一本しか残っていなかった。

暁書房のアパートで小松は、すべての真相を知った。

まず山崎は代議士ではなく、まだ出来たばかりの出版社の責任者に過ぎないこと。農林省食料安定供給事務局などという部署は存在しないこと。ここにおいても代議士

にはなれないということ。

小松は愕然としたが、もはや引き返すことはできなかつた。今から村に帰ったとて、家族が仕事を放棄しようとした彼を裏切り者と見做し、強烈な折檻を加えることは目に見えていた。

「代議士さんじゃなくてもいいです！どうかおらをここに置いてくださらねえでしょうか。おらはもう行く当てがねえんです」

こう言われてしまつては、山崎も川上も彼を追い出すことはできなかつた。二人は小松を暁書房の小間使いとして雇うことを決めた。

小松は鼠のように出っ張つた前歯をひくひくさせながら、嬉しそうに書類を書いていた。字は書けるが、おそろしく汚かつた。そもそもペンの持ち方が、右手でがしと掴むようなのである。字は一部枠から飛び出し、なぜか顔にインクが飛んでいた。「まさか暁書房の新社員第一号がこいつになるとはなあ」

「コーさんが無責任なことをするからだ

よ」

紆余曲折ありながらも、ようやくアパートに人が増えたのであつた。

もしかしたらこの小松五郎は、一種の福の神だったのかもしれない。彼の入社後、暁書房には続々と入社希望者がやつてきた。翌月までに四人の新社員が加わつたのである。

小松の次にやつてきたのは北島悠紀彦きたじまゆきひこという三十二歳の男であつた。山崎と同じ年で、背丈は山崎より少し低いくらいであつた。どこで手に入れたのか、髪の毛を見事にワックスで固めている。そこそ良い顔つき。

大阪生まれで、面接では隠すこともなく堂々と関西弁で喋つた。

「俺は言われれば何でもしますさかい、こき使つてください。あと、俺むかし劇団で脚本書いていたもんで、小説みたいなものも書けます。雑誌を創ると聞いてますけど、よかつたら俺の小説も載つけてください」

「それはありがたい。うちはちょうど記事

や話を書く人を探していたところですよ」
「ほんまですか。ならもう、よろしくお願
いしますわ」

二人目は坂本清司さかもときよし。一九〇〇年生まれの
四十六歳。

うっすら白髪しろかみの混じった大人しそうな
男で、痩せじしである。

「戦争が始まる前は出版社で雑誌を出し
ていました。雑誌と言っても、そんな大し
たものではありませんが。でも経験はあり
ますから、編集でも会計でも執筆でも何で
もさせていただければと思います」

(ハジメちゃんが老けたらこんな感じにな
るのかもなあ)

と山崎は思った。穏やかな人柄といい、
出版社の経験値といい、二人はどこか似て
いるところがある。

三人目は宮川静男、三十九歳。

先ほどの坂本清司よりも体が細く、遠く
から見るとマッチ棒のように見える。頭髮
が染めているのかと思うほど黒く、目の下
にうっすらクマができています。見るからに

病弱びじやくそうな男である。

しかしその経歴は見事で、旧制灘中学を
卒業後、東京帝国大学で国文学を学び、そ
の後は考古学に興味をもち独学で調査・研
究を行なっているのだという。

「えっと、あつ、中世の風俗に興味があり
まして、調べています。ただ公的な研究機
関に入っていないものですから、ちゃんと
した雑誌に論文を出せなくて。えっと、こ
れから出版する雑誌って、論文とか載せて
も、だ、大丈夫ですかね」

「大丈夫ですよ。ただ、うちの雑誌は学術
誌とか文芸誌ではなくて、エロ雑誌なので
す。それでもいいですか?」

「あ、大丈夫です。言い忘れていたんです
が、私は中世の性風俗について興味があっ
て、性を扱っているという点では共通して
いるかな、と」

「それはちょうどいいですね! よろし
くお願いします」

そして四人目。これが、凄かった。

六月二十九日のことである。山崎と川上
は、アパートの外から聞こえる叫び声で目

を覚ました。大音声で妙な祝詞のようなも
のが聞こえるのである。

急いで外に出てみると、アパートのそば
で袈裟けさを身にまとった僧侶が踊っていた。
すでに彼の周りには人だかりができてい
る。

「嗚呼、懺悔せよ日本人! 偉大なる生殖
真宗のもとに首を垂れよ。世の根源は生殖
に在り。かつて偉大なる伊弉諾尊いざなぎのみことと
伊弉冉尊いざなみのみことは高天原から芦原中津国に降り
立ち、己がそり立つ凸と、いと濡れたる
凹とを結合させ、大八島国を産み、諸々の
神を誕生させた。これすなわち偉大なる大
日本国民は凹凸によって生まれたという
ことなり。しかし見よ、時代は凹凸を穢れ
として忌み嫌ひ、のけ者にし、侮辱した。
その結果がかの天災だ。空からはB二九の
焼夷弾降り、海からは鉄の船が艦砲射撃を
以て海辺を蹂躪せり。我らは再び凹凸に懺
悔しなければならぬ。偉大なる生殖真宗に

帰依せねばならぬ。生殖という神聖な大事
実は宇宙および万象の活現象である。南無
阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

手に持った小さな太鼓を叩きながら、道
の真ん中で叫び歌う坊主。手首には大きな
数珠をぶら下げ、人より長い顎を揺らし揺
らし踊る姿は、まるで正氣の人の所業では
なかった。

「なんだありゃ。なんかの宗教か？」

「山崎さん、俺大阪にいた頃聞いたことあ
るで。九州の山口のほうで何やら新興宗教
が出来た言うてな、その宗教というのがひ
たすら踊るうちゅうもんらしいですわ。も
しかしたらあの坊さんも、踊る宗教か何か
かもわかりませんで」

山崎と一緒に起きてきた北島が、物知り
そうに言う。彼はアパートを下宿として使
っていた。

奇怪な坊主が奇怪な文句を垂れるのを、
人々たちは途中まで静かに聞いていたが、
終わる気配がないことに気付き始めると、
次第に「やめろ」と叫ぶ者が現れた。しか

し僧侶は聞く耳を持たない。

「何教だか知らないが、ああやっていつま
でもうるさいと仕事に障るな」

ついに山崎が飛び出して、僧侶の腕を掴
んだ。

「お坊さん、祝詞は寺でやんなきゃだめだ
ぜ。ここじゃ迷惑だ」

すると僧侶はきつと山崎のほうを睨み、
反駁した。

「汝は何もわかったらん。余は今日、天啓
によってここに來ておるのだ。いつものよ
うに薄明の中、目を覚ましてみると、眼前
に金色に光る凸が降臨して余に言った。

『汝の教えを求むる民草が有楽町にて待
っている。すぐに荷物をまとめて出立せよ。

民の居場所は暁書房なり』と。それで余は
こうして朝から祝詞を奉じておるのだ。し
かし暁書房の連中はちつとも姿を見せん。

なんと不謹慎な連中だ。信心ある民ならば
余が背に後光が射すのを目の当たりにす
るに違いないが」

「俺が暁書房の責任者だよ」

坊主は目をぱちくりさせた。

「汝が暁書房の人間か」

「そうだ」

「ならばどうしてもっと早く言わんのだ。

おほん。余は伊予宇和島が金精寺第八代目
住職 おおくぼおうつ 大久保応凸。偉大なる凹凸の導きに

より生殖真宗を布教しに参上した。ささ、
早く余を案内せぬか。余は曲芸の熊ではな

いぞ」
今度は山崎が目をぱちくりさせた。

「あんたは暁書房に入社したってこと

でいいのか？」

「そうだとさつきから言っている。ほら、
早く」

こうして四人目の新入社員、大久保応凸
は暁書房社員になった。聞くとところによ
ると、一八九一年生まれの五十五歳だとい
う。なのに顔つきが四十六歳の坂本清司とそ
れほど変わらないのは、彼が言うところの
「凹凸」の御利益なのだろうか。

かくして、たった二人だけだった暁書房
は、たちまち七人に増えた。と言つても、
七人。執筆陣も編集も会計も何もかもすべ

て合わせて七人しかいない。この人数で果たして雑誌がつくれるのか。

「最悪、創刊号は俺も原稿を書いてページ数を稼がなきゃな。募集をかけてこれなんだから、ここから号を重ねて社員を増やしていくしかない」

ひとまずは七人での暁書房である。

アパートに住むのは山崎・川上のほか、北島、大久保、小松の三人。坂本はすでに都内に自宅を持っており、宮川は別の場所で下宿をしているらしい。

これまで自分の部屋を持ったことがなかった小松は、四畳一間の部屋に興奮し、畳の上で転がってばかりいる。大久保は入社初日から自分の部屋に箱を積み、簡単な祭壇をこしらえた。てっぺんには彼の私物の男根像を配置し、得々としていた。この二人に比べれば、アパート暮らしに慣れてる北島の落ち着きようときたら。

七月一日。

山崎はアパートの一室に社員全員を集めた。山崎と川上は背広をまとい、緊張の顔つきである。

「諸君、あらためて俺が暁書房責任者の山崎耕作だ。これからは社員七名で新しいエロ雑誌の創刊に向けて本格的に動き始める。そのために、まずは全員に役割を振り分けた。これを」

山崎は部屋の壁に一枚の紙を貼り付けた。紙には社員の名前と、それぞれの役職が書かれていた。

- ・ 山崎耕作 .. 暁書房責任者。編集長。
- ・ 川上一 .. 暁書房副責任者。副編集長。
- ・ 坂本清司 .. 会計・相談役。および作家。
- ・ 北島悠紀彦 .. 広報・作家。
- ・ 宮川静男 .. 作家。
- ・ 大久保応凸 .. 作家。金精寺暁書房支部責任者。
- ・ 小松五郎 .. 雑用。

山崎と川上を主軸とし、出版経験の豊富な坂本を会計兼相談役に。北島は前職で劇団員をしていた経験から広報に。宮川はひとまず作家。大久保は作家だが、本人たつての願いで金精寺暁書房支部責任者の肩

書を付けた。小松は雑用。

「当分はこの編成で動いていくことになる。それぞれの具体的な活動内容だが、まず俺と川上は雑誌の格を上げるためにもうひとり有名作家もしくは有名画家の獲得に動く。北島君は雑誌の広告を掲載してくれる新聞社を最低二社見つけてくれ。それからうちの雑誌を扱ってくれる書店との交渉も。宮川君と大久保住職はひとまずは執筆に専念。坂本さんは他の社員へのサポートと、会計の管理をお願いします。とくに北島君は未経験の仕事が多いでしょうから、相談役になってください」

皆がうなずく。

「何かこの場で連絡しておきたいことがある人はいますか」

川上が手を挙げた。

「これはコーさんなんですけど、先ほど言っていた有名作家云々について、一人候補者がいます。画家の井田清風氏です。戦前にサディスティックな絵画を描いていた方で、うちのようなエロ雑誌の挿絵もしくは表紙絵を描いていただくには適当な方

かと思ひます」

「よし、では明日か明後日には交渉に行つてみよう」

山崎は今一度背広を直し、声高らかに宣言した。

「我々が目指すのは、時代の空気を打破するような妥協のない猥雑誌。こうして集まったのはひとつの運命、皆で力を結集し雑誌の創刊を達成させよう。現時点での創刊号発行は十月一日とする。各自仕事場についてくれ！」

おう、という声がアパートに響いた。炊事場で皿を洗っていた谷マサ子も小さく

「おう！」

とつぶやいた。
集会終了後、社員はアパートに用意された各自の仕事場に散った。

部屋にはひとつずつ机が用意されている。これは大家のマサ子が晝書房結成祝いとして用意してくれたものであった。

「コーさん、あとで僕の部屋に来てください」

「ん、わかった。すぐに行く」

山崎は川上の部屋に行く前に、廊下を回

ってそれぞれの部屋を覗いてまわった。北島の部屋ではすでに坂本と一緒に今後の計画について話し合いが行われている。宮川は床一杯に資料を並べ、難しそうな顔をしていた。これから雑誌に載せる論文について考えるのだろう。大久保はさっきまで来ていた袈裟を脱ぎ、机に向かって書き物をしている。小松は大家のマサ子について食器の片づけをしているところだ。

(それにしても変な人間ばかり集まったものだなあ)

いや、それは自分も同じか、と独り言つ。しかし考えてみれば去年の今ごろはまだ大陸のほうで雑用をしていたのだから、一年足らずでここまで状況が変わると思つていなかった。このまま行けば、来年はさらに状況が変わっているかもしれない。(さて、俺も自分の仕事にとりかかろう。これからもっとおもしろくなるぞ)
「おまたせ、ハジメ。それで、話っているのはさっきのことか？」

「そう、その話」

川上から乱歩から貰った『ばらいそ』を山崎に見せた。

『『ばらいそ』！ しかも俺がまだ見たことない号だな。どこで手に入れたんだ？』
「江戸川乱歩先生から貰ったんだ。さっき言った画家の井田清風は、『ばらいそ』に挿絵を載せていたことがあるんだって」

川上が例のページを開くと、体を麻縄で拘束された女が無数の蛇と桶の中に入っている挿絵が山崎の目に飛び込んだ。山崎は思わず、おお、と漏らした。

「まるで見世物小屋をそのまま絵にしたみたいだな。この画家の絵を表紙絵に出来れば、相当なインパクトになるな。この絵を描いた画家を狙う、と」

「そう。井田先生は今、駒込の道坂町に住んでいるみたいだから、明日訪ねよう」

「わかった」

「それから——」
すんでのところで言葉が喉に詰まった。

「ん、どうした」
「いや、やっぱり何でもなし。とりあえず、清風先生を引き込めるかどうか、うちの

雑誌の鍵だから、気合入れていこう」

「そうだな」

山崎が部屋を出ていくと、川上ひとりになった。

(やっぱり訊けなかった)

さっき喉から出かかった言葉だった。川上は山崎に訊ねてみたかったのである。

——コーさんって、どうしてそこまでエロ雑誌にこだわるんですか。

そういえば、今まで一度もその理由について尋ねたことがなかった。山崎に付いていこうと思つたのは、彼の夢があまりにも荒唐無稽だったからだが、本人がどうしてエロ雑誌をやりたいのかはまだ知らない。先日乱歩に、君は山崎の本心を知っていないければならない、と言われて、川上は思つたのである。

(たしか、戦時中にたまたま見つけた『ぼらいそ』に感動したと言っていたけど、だからといってそれが自分もエロ雑誌をつくりたい、っていう感情につながるかはわからない。コーさんには、何かエロに対する哲学みたいなのがあるのかもしれない)

川上は知っておきたかった。ただ、良い機会が見つからなかった。

(コーさんは一体、何を考えながらエロ雑誌をつくっているんだろう?)

翌日は雨だった。

東京都駒込動坂町(現文京区)を歩いてみると、坂道を雨水がとろとろと流れながら坂の下まで下つていった。山崎と川上は傘をさして、スーツが濡れないように進んだ。

町の家々はどれも建つたばかりのように新しかった。山崎は雨を防ぎながら、もしかしたらこの一帯も空襲の被害にあつたのかもしれないと思つた。実際、動坂町は東京大空襲の折に大規模な火災に遭い、家屋は悉く燃えてしまったのである。

「この辺りだと思ふけれど」

傘をあげると、目の前の家の表札に「井田二郎吉清風」とあつた。巧みな筆運びである。

「ごめんください」

返事がない。もう一度戸を叩いて

「ごめんください」

と呼んでみたが、返事はなかった。家中はしんと静まっている。

ちょうど通りかかった婦人が

「清風先生に御用かい？」

と尋ねた。

「清風先生は今昼寝だよ。三時にならないと、半鐘が鳴っても起きないもの」

川上の腕時計は二時半を指している。まだ三十分ほど待たなければならぬ。といっても外は雨で、どこかに行くのも億劫だった。二人は玄関前の軒下に腰を下ろして、時が経つのを待った。今度はこちらがうとうとしてきた。二人は十分もしないうちに、座ったまま寝むってしまった。坂道を歩いてきた疲労がどつと出てきたのだ。

しばらくして。

「おうい、お兄さんお兄さん。起きとくれえ」

肩を誰かに叩かれて、山崎は目を覚ました。

「お、起きた起きた。おはようさん」

振り返ると、坊主頭の老人がにっこりと

笑っていた。

「どこのどなたか知らんが、そこに居られると郵便受けが見れんでな。ちと、そこ退いてくれんか」

「す、すいません。すぐ退きます」

山崎は川上の身体を揺すぶって起こした。

老人はえっちらおっちら郵便受けの中身を見て何も入っていないのを確かめると、またえっちらおっちら戻ってきた。身長は小柄な川上よりもさらに低い。一五〇センチあるかどうかというところである。「雨を眺めながら昼寝をするのもまた風流じゃが、せいぜい風邪は引かんようにな。それじゃ、わしはここで失礼」

家の戸を閉めようとするのを、山崎が止めた。

「すいません、井田清風先生ですよ」

「いかに、わしは井田清風じゃが」

「少しお時間をいただいてもいいですか！」

「はあ」

家の中はひどく散乱していた。玄関はま

だ整頓されていたものの、廊下の時点で絵の具のチューブや鉛筆が転がっており、作業場らしい部屋の中に入ると、紙やら画材やら雑巾やら古新聞やらで足の踏み場もなかった。

「これじゃいかん」

と、二人は台所に通された。ちゃぶ台の上にはいつものものかもわからないちりめんじゃこの小鉢が置きっぱなしになっている他、表面に皺が出来た蜜柑や、片焼きせんべいの袋などが散らばっていた。清風はごみを簡単にどかし、

「散らかっていてすまん。普段は客人とは縁側で話すんじゃが、この雨じゃいかん。この辺に、適当に座つといてくれ。今茶を淹れるでな。そこらにあるものは好きに食ってかまわんよ」

山崎と川上は言われた通りに座った。さすがにちゃぶ台や床に散乱している食物に手を伸ばす気にはなれなかった。

「この散らかり具合、巨匠の感がありますね」

「ああ。天才のことを、偉大なる子どもと

呼ぶやつもいるしな。顔だつてそうじゃないか。まるで無邪気な子どもの顔だ」

こそこそ話していると、清風が茶を淹れてきた。

「わしが淹れる茶は駒込一じゃて」

飲んでみると、おそろしく薄かった。まるで白湯のような茶を飲み干してから、絞り出すように川上は

「こ、これは美味しいですね」

と世辞を言った。

「そうじゃ。最近の茶はどれもこれも濃くて茶の香りが強すぎる。あれじゃいかんわな。冒流じゃわ」

まだ清風宅に入ってから五分と経っていないのに、二人はこの老人が厄介な性格ではないかと身構え始めた。清風はまるでリラックスして、太く白い眉毛をくりくり揺らしている。

「いやいや、こんな雨の中待たせてしまつて、申し訳なかったの。わしは昼飯を食うとすぐに寝むたくなつて、この時間まで寝てしまふんじゃ。ところでお前さんたちは、どこのどなたじゃね」

「出版社暁書房社長、山崎耕作です」

「暁書房副社長、川上一です」

「山崎さんに、川上さんだね」

「今日はひとつ、井田清風先生にお願いがあつて参りました」

「ほお、お願いとな」

「実は私たち、今度新しく雑誌を創刊するのですが、その表紙絵をぜひ清風先生に描いていただきたいのです」

「雑誌の表紙絵。ほお、それは大したもんじゃな。ところでその雑誌はどういう類の雑誌かね」

「なかなか説明が難しいのですが、簡単に説明してしまえばこのような雑誌です」

山崎は鞆の中から、例の『ばらいそ』を出して見せた。その瞬間、清風の眉が大きく動いた。

「これは……」

「戦前に発行された『ばらいそ』という雑誌です。この雑誌に清風先生が挿絵を描いていたと伺いまして、それで、この挿絵のような絵を描いていただきたいのです」

あの凌辱されている女の挿絵が載って

いるページを見せた。清風は近眼らしく、ページに接吻するような近さでそれを見つめた。

「おお、これは十数年前にわしが描いたものじゃ。覚えとる覚えとる。ということはつまり、お前さんらは猥雑誌をつくらうとしてゐるわけじゃな」

「その通りです」

「そうか、猥雑誌か……」

山崎たちの視線が、今年齢六十四になる老画家に注がれる。

「いやだ」

「え」

「いやだいやだ。わしはもうこの手の誘いは懲り懲りなんじゃ。エロ雑誌の表紙絵を描いてくれだの挿絵を描いてくれだの何だのと、まるで蟻んこのように群がって来おつて、ああいうのはもうあの時代で十分じゃ！　そもそもな、わしがこんな目に遭うはめになったのは、全部この雑誌と、この南原梅雨という男のせいなんじゃ！　ああ、恨めしい恨めしい」

清風は雑誌の奥付の「発行人 南原梅雨」

と書かれたところを人差し指で叩きながら言った。喉に痰が絡むようで、かつ、かつと喉を揺らした。

「南原梅雨のせい？」

山崎が尋ねる。

「そうじゃ、全部この男が悪いんじゃ。こいつがわしが密かに撮った実験写真をどこから手に入れて、『もしうちに挿絵を描かないならこの写真を雑誌に掲載するぞ』と脅すんじゃ。それでわしは止むを得ずこういった絵を描いた。それなのにあの男、いつだかその写真を雑誌に載せおつて、『約束が違うじゃないか』と文句を言いに行った。何と云って来たと思ふ？　梅雨め、学者然と眼鏡をあげてから呆けたように『知らないよ、そんな約束』とぬかしおつた。それでわしは我慢ならなくなつた。こんな男の雑誌に二度と載せるもんかと思つたわい。なのに、それを知らない他の雑誌の連中が『清風先生、うちにも先生の絵を使わせてください』と寄ってきておる。ああ、思い出すだけで頭が痛くなるわ」

清風があまりにもまくしたてるせいで、

彼の唾が山崎の背広の袖や襟に飛び散った。まだ新しい背広である。二人はそれが気になって話もろくに入ってこなかった。

とりあえず、『ばらいそ』発行人の南原梅雨が「写真」を巡って清風に詐欺まがいのことをした、ということは理解した。もちろん二人には「写真」が何のことなのかわからない。

「ちよ、ちよと待ってください先生。その、『写真』というのは何ですか？」

すると清風は席を立ち、がらくたの散らばる作業場のほうへ消えていった。すぐに戻ってくると、二人の前に一葉の写真を置いた。

その写真は異様な写真であった。女が縄で縛られ、逆さ吊りにされているのである。しかも見る限り場所は屋内ではなく屋外で、床は満面の雪、女を吊るす縄は杉らしき木の枝から下がっている。おまけに女の腹が大きい。間違いない妊婦のそれだった。（これは絵ではなく本物か？）

一瞬清風の作品かと思ったが、それは間違いなく写真だった。つまり、これは本当

に妊婦が吊るされているのである。

「これは昔別れたわしの女房じゃ」

「女房!？」

「ああ、わしの実験のために逆さ吊りにさせてもらった。月岡芳年(注②)の無惨さをわが手に収めるためには必要な実験じゃった」

老画家は悪びれる様子もなく、平然と言いつつ放つ。

「女房は雪の中が寒い寒い言って嫌がってな。あまりに騒がしいもんだから腕や足を叩いてやったわい。そうしたら『ああ、あったかいわ』と言ってな。それで縄で縛って、吊るして、撮ったんじゃ。でも一枚しか撮れなかった。唇が青くなってがたがた震え出したもので」

山崎と川上は顔を見合わせて、同じことを思った。

(この人は本物のサディストだ——)

「この写真はわしの実験資料で、無暗に人に見せなかった。だが梅雨の手下の売文屋が勝手に『借りていく』とか抜かして持って行ってしまった。それでこのぎまだ。ば

かものじゃよ、彼奴ら。せつかくわしが安くない金を出して写真屋を呼んで撮ってもらった写真を盗みおって、けしからんにも程があるわ」

「ばかなのはあなただ!」

突然立ち上がったのは山崎ではなく川上だった。山崎は驚きのあまり座布団からずり落ちそうになった。

「何が実験資料です、もうじき子どもが生まれるという妊婦を、こんな寒い中逆さ吊りになんかして! あなたは自分の女房を痛めつけて心が痛まなかったんですか。唇が青くなって震えるほど寒気の中に曝して、お腹の子どもや母親がどうなってもいいんですか!」

「女房は実験をしてもいいと言ったぞ」

「そもそも実験をしようと提案する神経が理解できません!」

そうだった、と山崎が思ったのは、川上は他人の痛みに対して同情しやすい性格だったからである。以前山崎が小松五郎をだましたことが露見したときも、川上はオバーと思うほど山崎を叱りつけたので

ある。貧しい農家の子どもにあんな嘘をつくなんてかわいそうだ、許せない、と。きつと清風が「実験」を武勇伝のように語るのを聞いて、妊婦に憐みの感情を覚えたのだろう。立ち上がって、今にも清風の坊主頭をむんずと掴んで引き回しそうな形相である。こんな川上の様子は、山崎も見たことがなかった。

(ハジメちゃんがこんな怒ることがあるのか)

しかし当の清風は、そんな若手出版社員の説教など気にもとめていない様子で、小鉢の中のちりめんじゃこを口に運んだ。口元に微かな笑みが浮かんでいる。川上はそれを挑発と受け取った。

「何がおかしいんです！ 私はただ、至極当たり前のことを言っているだけです。非人道的だ、あまりに非人道的です。まるで生体実験じゃないですか」

「わからんか」

ちりめんじゃこをつまむ手を止め、清風は大きな目で川上を見た。丸い目である。赤子のようにもあり、狸のようにもある。

「あなたにはわからんか、どうしてわしがこんなことをしたのか。わしは冷血漢じゃない、人なみに人間の感情は理解しているつもりじゃし、女房を雪中吊り下げたのも、あいつには気の毒なことをしたと思っっている。だがわしは実験をやった。なぜがわからんか。あれだけじゃない、わしはこの雑誌の挿絵のように女房を縛って桶の中におち込んだし、ささくれだった麻縄でうつ血するほど縛ったことも、縛ったうえで髪をめちゃくちゃに乱したこともある。どうしてそのような鬼畜の所業をわしがしたか、わからんか、あなた」

川上は「わかりません」と言った。

「わかるはずありません、そんな変態性欲者の心のうちなんて」

「簡単じゃよ」

清風は息を吐くように

「楽しいからじゃ」

と言った。その声の調子は、先ほどまでの飄々爺としたものではなく、まるで山奥の寺に籠る老僧の遺偈のような荘厳さを纏っていた。

「わしは女を縛るのが好きじゃ。縛って、吊るして、女の顔に浮かんできた苦悶の色を眺めるのが好きじゃ。そしてそれを絵に描くのが好きじゃ。楽しい。堪らない。無論、ひどいことをしたと思う。気の毒をしたらと思う。だが、楽しいという感情が上回って来る。いくら立派な建物も、荒波に呑まれればそれまで、B二九やグラマンにやられればそれまで、それと同じじゃ。わしの頭上には縛られた女の姿態が降り注いでくるわい。それをどう止められようぞ」

清風は二人を作業場に案内した。床の物を踏まぬよう用心しいしい付いていくと、清風は押し入れから巨大な葛籠を引っ張り出した。中身はすべて絵だった。しかもそれらすべてに縄で縛られた女が描かれていた。あの挿絵と同じく鬼気迫るような絵筆遣いで、女の慙愧と苦悶の表情が描かれている。

(見事だ……！)

「空襲で絵のほとんどが焼けてしまったから、本当ならこの五倍は絵を描いている。そしてその絵の数だけ実際に女を縛って

きたわい。女房を、カフェーの女給を、遊女を、近所の未亡人をな。すべて楽しいからやった」

先ほどまであれほど威勢よく反駁していた川上も、葛籠から現れた作品の数々を目の当たりにすると、最早言い返す言葉がなくなった。目の前にある絵画は、社会で通用しているモラルや常識では説明ができない、聖か邪かという区別さえも無意味に思えてくるような迫力を持っていただけである。

「わしは同じことをこれまでに十人の人間に話したが、九人がわしを人非人だとか冷血爺と言って聞かなんだ。いつもそうじゃ、わしに共感してくれる者なぞおらんのだ。ささ、もうこれで用は済んだじゃろ。わしのような老いぼれ画家を雇ったらあなたたちの名声に傷がつくだけじゃ。やめておきなされ。ほら、雨もだいぶ小降りになつて——」

「わかったぜ、爺さん」

声を出したのは山崎だった。

「爺さんの話を聞いているうちにようや

くわかった。俺はどうしてこんなにもエロ雑誌をつくりたがってるのかってな。俺はずっとわかんなかったんだ。俺は戦争に出ているとき、たまたまこの『ばらいそ』と出会った。それから漠然とエロ雑誌をつくりたいって気はあったんだが、何でもこんなにもつくりたがってるのか、いまいちわかつていなかっただ。爺さん、俺はこの前エロ本を売りに行つてやくぎに殺されかけたことがあるぜ。俺はびびった。正直言つて小便漏らしそうだった。でも、何だか負けてられねえ気がしたんだ。何でだろうな。歯向かえば間違いなく殺されるのにさ、負けたくなかったんだ。それで思った。どうして俺は死にそうなのにエロ雑誌にこだわるんだらうって。ずっとわかんなかった。誰かのためにつくるのか？ エロ本で癒される兵士たちを見たからエロ本が作りたいのか？ それなら格好がつくけどよ、なんか違うんだよな。でも爺さんの話聞いてわかったぜ。俺は、楽しそうだからエロ雑誌をつくりたいんだ。楽しそうだから、エロ雑誌をつくったら素敵な何かが付

っている気がしたから、俺は動いてんだ。もしエロ雑誌をつくる途中で俺が殺されても、雑誌が出来るなら退かぬえぜ。エロなんて下らないって言われるかもしれないけど、俺はやる。だって俺が楽しそうだと思ってるからな。ああ、すつきりした。胸のつかえがとれたみたいだ。ありがとうよ、爺さん」

山崎は上機嫌だった。本当に胸のつかえがとれた気がしたのだろう。まくし立てたせいで呼吸は乱れていたし、額には汗の玉が滲んでいた。しかし下り坂を止まらずに駆け下りたときのような爽快感があつた。折しも屋外の雨は勢いを増し、車軸を流すような雨が地面に叩きつけられている。(今外に飛び出したら、きつと気持ちがいいだらうな)

窓の外を見ながら山崎はそう思う。

一方の川上、そして清風は啞然としていた。だが川上は気付いた。

(今のがコーさんがエロ雑誌にこだわる理由だったんだ。「楽しそうだから、やる」。金がなくても印刷所がなくても、社員が少



なくとも殴られ殺されかけてもコーさんが平然としていたのは、そんな状況に負ける気すら起きないほどエロ雑誌に楽しみを見いだしていたからだだったんだー」

哲学も、道徳も、責任感もない。目の前の男は、「楽しさ」、それだけに突き動かされていたのだ。

そして清風。

清風は山崎の言葉を聞きながら、「彼」を思い出していた。他でもない、南原梅雨である。

かつて清風の絵が風俗壊乱の罪に問われて留置所に送られた際、隣の房にいたのが南原梅雨だった。なぜ梅雨が留置所にいたのかは、毫碌して思い出せない。そのときすでに二人は知り合いで、例の写真無許可掲載事件のあとだったから、清風は梅雨を嫌っていたのだ。

しかし留置所があまりにも退屈だったせいで、二人は自然と話し始めた。他愛もない世間話から、武勇伝、そして自身の流儀について。

清風は川上たちに話したのと同じ内容

を、梅雨に語った。

（どうせこの男にはわかるまい。梅雨は性欲と興奮を煽る文章を売る売文屋だ。わしのような芸術家の心がわかるわけ——）

すると梅雨は呵々大笑し、

「同じこと考えているやつがいたぜ！

おれも全く同様のことを考えながらエロ本を売ってるんだ。やつぱり楽しいことじ

やねえとこんな馬鹿な真似は出来ねえよ

な！ おかげで地上では警察に追いかけ

られ、死んだら地の底で閻魔に追いかける

始末さ。しかしこんな牢屋にいて心の

友人と出会えるとは、お天道様も粋なこと

をしやがる。はっはっは、愉快愉快！」

と叫んだ。

あまりにも大笑いするものだから、看守

が飛んできて棒で以て梅雨を打擲した。そ

れでも笑いが収まるまで時間がなかった。

無機的な留置所の静寂を、梅雨の笑い声が

破る、その様は清風の脳裏に焼き付いて離

れなかった。

そんな男と同じような雰囲気、目の前

の男から感じるのである。

（この若者になら、わしの絵をくれてやってもいいかもしれない）

実は留置所を出てから一度だけ、清風は

『ばらいそ』に絵を出したことがある。既

に「写真」は人質としての価値をなくして

いたから、もう清風は自分の絵を梅雨に渡

す必要はなかった。なのに清風は使用を許

可した。許可したのは、清風が梅雨の心意

気に魅せられたからだった。

そして今、清風は山崎耕作に魅せられて

いる。

——描こう。

「山崎さん、絵を描くよ。表紙絵がいいか

い、それとも挿絵がいいかい」

山崎は喜びのあまり清風を抱きしめた。

抱きしめた、と言っても清風より背丈が大

きい山崎は、清風をすっぽり包み込むよう

な形になった。

「それなら表紙絵を！」

「おお、わかったわかった。こんな老骨の

凌辱絵でいいなら描いてやる。その代わり、

ふた月おくれ。そうしたら、必ずいい作品

が描ける」

「ありがとう爺さん、本当にありがとう。助かったぜ！」

興奮のあまり敬語もすっかり崩れてしまっていることに、山崎も、そして清風も気付いていないようだった。

こうして山崎たちは、凌辱絵の画家井田清風に表紙絵を依頼することに成功した。

清風宅を去る際、川上は清風に詫びた。

「先ほどは先生の信条を露ほども理解できていなかったにも関わらず、あのような無礼なことを言ってしまう誠に申し訳ありませんでした。どうか、お許しください」

清風はけろりとした顔で、

「そんなこともあったのお。それよりもわしはこの後すぐに洗濯物を干さねばならん。ようやっとお日様も出てきた」

と空を見上げた。朝から降り続けた雨は、先ほどの土砂降り以降らせる雨を使いつくしたようだった。しかし、間もなく時間は五時になろうとしている。空は青空ではなく赤らんでいた。今から洗濯物を干しても、今日中には乾かないに違いない。しか

しそんなことは最早どうでもよいのだ。

「山崎さんや、楽しむのは結構じゃが、やぐざに殺されてもしたら元も子もないぞ」
「流石にあんな真似はもうしないさ。爺さんこそ大丈夫か、絵を描くとは言ったが、そのモデルはどこで見つけるつもりだ？」

清風はためらわず

「またカフェーにでも行って見つけるじや。女つてもものは、だまして使うものでござんすよ」

「はは、こりゃ敵わないぜ」

山崎は苦笑した。

「お前さんは笑い方まであやつにそっくりじゃのお」

「そう言えば爺さんは南原梅雨と知り合いだっただよな？ 今、南原梅雨がどこにいるか知っていたりするか？」

「さあな。あやつは戦時中からさっぱり音沙汰がないんじゃない。今ではどこで何をしているのかもわからん。もしかしたらもうこの世にはおらんかもしれないのう」

そうか、と山崎は呟き、清風宅を去った。

二人は元来た坂道を下っていく。

川上は時々、山崎のほうをちら、ちらと見た。彼がどのような顔をしているか気になったのである。エロ雑誌に魅せられた三十二歳の男の顔は、男前とまでは言えないものの、自信に満ち溢れていた。ちょうど夕陽と向き合っているため、山崎の白い頭髪と赤い落日がうまい具合に調和している。

川上は

（この人が楽しいのなら、きっと僕も楽しいんだろうな）

と思う。あの日もそうだったではないか。有楽町駅前の食堂で、「エロ雑誌を創刊したい」と言う山崎の顔を見る川上の目は、子どものように澄んでいた。

それから二か月が経ち、一九四六年九月。

山崎と川上は夕飯のお菜を買いに出かけ、帰るところだった。買い物袋を持つのは山崎の仕事だった。川上は山崎に並んで歩きながら、鼻歌を口ずさんでいる。

「……咲あいてえいるう」

「何歌ってんの」

「この前ラジオで流れていたんだよ。名前は何だっけな。『みかんの咲く丘』(注③)だったっけ。いい歌ですよ。女の子が歌っていて」

「ふうん。りんこの歌の次はみかんの歌か」
帰ると、まだアパートは賑やかだった。いつもならこの時間には帰る者が出てきているが、今日はまだ全員いた。各自の原稿があたり、坂本を中心に夜通しで校正を行なうつもりなのである。もちろん後からそこに山崎と川上も加わる。

この日の夕食は鍋だった。せっかく暁書房の全員が集まっているんだから鍋でもやったらいいじゃないの、と言ったのはアパートの大家の谷マサ子。

アパートの中で一等広い山崎の部屋に、各々の器を持って集まる。部屋の真ん中には土鍋が鎮座し、ぐつぐつと音を立てている。

「さあさあ、お食べお食べ！」
マサ子が鍋蓋をとった。煮えていたのは大量の白菜とニラ、豆腐、厚揚げ、そして臍物だった。

「こりゃ豪勢な夕食やなあ」

「金精様もお喜びになられるぞ」

「昨日近所の人から貰ったんだ。親戚が豚をさばいたんだけど臍物はいらなかつてさ。その人は臍物嫌いで食べないんだつて」

器によそい、談笑しながら出来立ての鍋をつつく。まさに同じ釜の飯を食う仲間、いや同じ鍋のたねを食う仲間、といったところだろうか。

「おい、爺さんそれは俺がとうとうとしたモツやないか、盗むなや」

「なにをう、畏れ多くもこのわしに向かつて無礼な口をきくとは不届千万じゃ！」

「ちよ、ちよっと喧嘩はやめねえですか」
「小松は黙ってる！」

鍋の具で争う者たちを他所に、姿勢を正して鍋を食べるのは坂本清司。山崎はこっそり坂本の隣に座った。

「校正の調子はどうです？」
「うん、予定より早く進んでいるね。これだったら来週までに見本ができるんじゃないかな」

「本当にありがとうございます。この二か月間は坂本さんに頼りっぱなしですね。会計の仕事だけじゃなく、全体にも気を配っていただいて。しかも中身の記事にデザインも」

「良いんですよ、山崎君。こういうのは経験者がやる仕事です。山崎さんだって、これまで雑誌をつくったことがないのでよくここまで指揮が出来ますね。私が若い頃は何をやっていいのかもわからずオドオドしていたものです」

「誤魔化し誤魔化しですよ」
「ところで、例の表紙絵が届いたんですつてね」

「ああ、井田清風先生のですね。届きましたよ。ちょうど今部屋に置いてあるんです。見ますか？」

「見せてください」
山崎は部屋に仕舞ってあった一枚の絵を取り出した。鍋を取り合っていた者たちも気になって絵のまわりに集まった。

「それじゃ、広げるよ」
紙に描かれていたのはひとりの女だつ

た。杭に縛りつけられ、髪の手が乱れたひとりの女。女の足元にはめらめらと火が燃え盛り、今にも女を呑み込まんとしている。女はロザリオを握り苦悶の表情を浮かべながら天を仰いでいる。纏っている服からは右の乳房がこぼれていた。

おおっと一同感嘆す。誰もが見事な絵だと思った。

『伴天連ばてれんの女』という題名だそうです

「これは素晴らしい。あの気難しい清風先生がこれだけの絵を描いてくださるとは」

「坂本さん、清風先生にお会いしたことがあるんですか？」

川上が尋ねると、坂本は一瞬顔をこわばらせたが、すぐに微笑みを取り戻し

「ええ。ずっと前にご縁がありました」と言った。

「しかしまあ、えらいべっぴんさんの伴天連やな。おっぱいなんて、ほら、こないに白いわ」

「おい北島、夜遅くに勝手に持ち出しているかがわしいことに使うんじゃないぞ」

「しゃ、社長、どうして俺の心の中を読めるんや」

「本当に使うつもりだったんかい」

場がどっと笑いに包まれた。

作業は夜通し進められた。坂本たちは校正を、山崎と川上は北島が交渉した新聞社と広告について最終調整を行なった。季節は夏の盛り。夜になっても皆うちわであおぎながら作業をした。

ある晩、もう寝床に入ろうかと廊下を歩いていた川上は、山崎の部屋の灯りがまだ点いたままなのに気付いた。校正作業も山場を越え、さすがに限界を超えた社員たちはもう眠りに落ちていた。山崎の部屋だけ、まだ電気が点いていた。

川上はこっそり部屋を開けた。山崎はひとり机に向かっていた。

「何をしているの、コーさん」

呼びかけると、山崎は振り返った。このところ山崎も徹夜で仕事をしており、目は隈が浮いていた。しかし当人の表情からは疲れが見えなかった。

「ちよつとものを書いているんだ」

「あれ、コーさんも何か記事を載せるんだっけ」

「この人数じゃ少なすぎるからな。別に俺だって文章が上手いわけじゃないけど、中身を埋めるためならエロ小説だって書かさ。でも、今書いているのはエロ小説じゃない」

「いったい、何を？」

山崎が手招くので、川上は後ろから机の上の原稿を覗き見た。

「あっ」

そこにあつたのは、エロ雑誌創刊の辞、の原稿だった。どの雑誌も、創刊号にはどうして雑誌を創刊しようと思いついたのか、どんな雑誌をつくっていくのか、といったことを宣言する「創刊の辞」が載せられる。山崎が書いていたのはそれだった。しかも、

(新しい雑誌のタイトルまで付けられている……！)

「コーさん、タイトル決まったんだね」

「どうだ、悪くないだろう？」

「うん、とてもいい。ちなみにこのタイト

ルにはいったいどんな意味があるの」

「そうだな。俺ずつと新しく創刊する雑誌のタイトルについては色々と考えていたんだが、やっぱり脳裏にちらつくのは『ばらいそ』なんだよな。俺はあの雑誌のおかげでエロ雑誌というものに出会えたし、こうして机に向かうことが出来ている。だからやっぱり、恩義みたいなものはあるよな。『ばらいそ』みたいに人々の記憶に残るエロ雑誌にしたいな。あとは文字通り、このエロ雑誌が読者にとって束の間の娯楽になるようにと思って」

「なるほど。よく出来たタイトルだ」

川上は、いかにも山崎が創刊した雑誌らしいタイトルだな、と思った。このタイトルが表紙に大きく載る様子が目に浮かぶようだった。

九月九日、ついに雑誌の見本が完成した。「山崎さん、山崎さん。俺にも見本見したってや。まだ見たことがないんや」

「いいよ、ほら」

北島は山崎から手渡された見本に目を輝かせた。真っ先に目についたのはそのタ

イトルだった。大きく書かれていたのは

楽園

の二文字である。

「これはまたよく出来たタイトルや！」

楽園、の文字の下には、あの井田清風「伴天連の女」がダイナミックに描かれている。タイトルと一緒に見ると、あたかも絵の中の女が火に焼かれながらも楽園を夢見ているようにも見える。まるで清風が山崎のタイトルを予感してこの絵を描いたのかと思うような組み合わせだった。

北島はページをめくった。現れたのは、以前山崎が書いていた「創刊の辞」である。

「楽園」創刊の辞

一九四五年八月十五日、我々日本は米英との戦争に敗れた。みかどは耐え難きを耐え忍び難きを忍びと斯く宣ふたが、依然として現実生活は苦しい。にも拘わらず万苦に屈せず祖国再建に向かふ民衆の熱気たるや凄まじい。然しそんな民衆に安らぎの

ときはあつたか。悩み疲れた我々を癒すうるほひはあつたか。月刊雑誌「楽園」は読者諸君を啓蒙しやうとか、民主的な生活を指導しやうとかいふ大それた気持は全然ありません。読者諸賢が、平和國家建設の心身共に、疲れきつた、午睡の一刻に、興味本位に読捨てて下れば幸いです。

「楽園」発行人 山崎耕作

「山崎さんって文章上手いんやなあ。この『疲れきつた、午睡の一刻に、興味本位に読捨てて下れば結構です。』ってところなんか、浪漫的な感さえるやんなあ」

「そうやって褒めても何も出ないぞ、北島」
しかしこの文章は山崎自身気に入っていた。多少格好をつけすぎたところは否めないが、エロ雑誌にはいい意味で似つかわしくない文章になったのではないかと自負している。

「で、この次は目次やんな」

目次

『楽園』創刊の辞……山崎耕作

ダツチワイフ礼讃

……金精寺住職 大久保応凸

エログロ時代拾遺……坂本清司

さうして男は女を犯した……北島悠紀彦

青いスカウト……川崎作太郎

平安朝の文献に見る閨の構造

……宮川静男

自由時代とエロ……川上一

くちびる……足立虎彦

編集室だより・編集後記

表紙……井田清風「伴天連の女」

「えっと、たしか川崎作太郎ってのは山崎さんのペンネームやんな。お、俺の書いた

小説も二本ちゃんと載ってるな。この足立虎彦ってのが俺の変名なんやけど、ずいぶん骨折って書いたんやで、山崎さん。一本書くだけでも疲れんのに、もう一本書いてと言われたときはびっくりしましたで」

「あのときは申し訳なかった。でも安心しろ。ちゃんと雑誌の最後に寄稿募集の広告

も出しておいた。もしこの雑誌が売れば、次号は寄稿してくるやつらもいるかもしれない」

「ほんまそれを願うばかりですわ。ところでこの創刊号はどれくらい印刷する予定ですか」

「とりあえず二万部印刷する。そのうち一万部はうちと契約している書店に置き、もう一万部は闇市とかそのあたりに屋台を出して売るつもりだ。一冊十円。あとはどれだけこの在庫がはけるかだな」

二万部は、晝書房にとっては冒険的な数字だった。新聞社にも広告が載り、以前の『あかつき草紙』で書店からの信頼も獲得してはいるが、どれだけ売れるかは蓋を開けてみないとわからない。

翌日、山崎は単身で新宿マーケットに乗り込んだ。目的は、以前関東尾津組組長尾津喜之助と交わした約束を果たすためである。

（果たして喜之助さんが井田清風を知っているかどうか）

山崎は以前監禁された尾津組事務所を

訪れたが、そこには喜之助はいなかった。しかし山崎を殴った強面の組員がいた。すっかり喜之助にしばらくたらく、山崎に對する態度は幾分もやわらかくなっていた。

「組長なら本部のほうにいますすが、おそらく話はできないかと思えます」「どうして。何かあったのか」

「最近は何介な事件ばかり起きてるんですわ。以前に組長と昵懇の松田組組長松田義一さんが殺されて、カシラを失った松田組が華僑の連中とドンパチやったもんで『これはまずい』と喜之助組長が調停に出

たんですが駄目でした。今も渋谷は日本人と華僑とでぴりぴり殺気走ってますよ。それだけじゃない。今度はうちの喜之助組長が新宿の住民に訴えられちゃいます。いや、うちは新宿がもつと栄えるようにと、輪タク（自転車タクシー）事業を始めたんですがね、それを知った地権者どもが怒ったんですわ。うちの土地で勝手に商売始めやがって、って。まったく、誰のおかげで新宿がここまで平和でいられたか知ら

んのかって感じなんです、まあ、そんなことで今組長は忙しいんです。もし急の用事でなければお引き取りいただけると……」

しかし山崎には退く気はない。毛頭ない。「こっちはこっちで人生最大の商売が懸かってるんだ。約束は約束だ。ちょっと本部まで行ってくる」

山崎はそう言う事務所を後にし、すぐさま本部へ急いだ。

「出版社暁書房の山崎耕作と言えはわかるはずだ。もしわからないと言ったら、生意気なエロ本売りが来た、と伝えてくれ」
そう言うと、間もなく組員が山崎を組長の部屋に通した。

「お久しぶりです。暁書房の山崎です」
そこに喜之助はいた。右ひじを机に立て、手の甲を額につけて休むような恰好をしているが、目は見開かれ、机の上の書類に目を通して見る。

「すまない。この書類だけ読んでしまおう」
山崎は一目で男が疲労を抱えていることを悟った。気遣いの言葉を投げかけようと

思ったが、

「余計な世話だ」

と一蹴されるに違いない。やくざはブライドの高い職業だ。そして喜之助は、東京最大の闇市を司る大親分である。きっと本当ならば姿勢を崩して弱音の一つや二つを吐きたいところを堪えて、あたかも思案しているように見せているのだ。

（俺がいくら偉い出版社の社長になっても、この人には勝てそうにないな）

「よし、終わった。待たせたね、山崎君。君のことはまるで昨日会ったかのように覚えてる。それで、約束を果たしに来たんだらう？　どんな大物を雇った」

山崎は「こちらです」と、清風の「伴天連の女」を広げた。

「このような絵を描く画家をご存じではありませんか」

喜之助は絵を見ると、にやりと笑った。
「縛り絵の井田清風翁だな？」

山崎は頷いた。勝利を確信した。

約束通り山崎は喜之助の署名とともに新宿マーケットの中でも最も新宿駅に近

い一等地を使用する権利を渡された。かくして暁書房は東京最大の闇市の、しかも最良の場所を商売に使うことができるようになったのである。

いよいよ、『楽園』が世に開かれるときが近づいている。

九月二十日、嶋中飛行機株式会社印刷所「行進社」で雑誌の印刷が始まった。印刷用紙は『あかつき草紙』のときの粗悪な仙花紙ではなく、かつて川上が大日本産業報国会の倉庫から持ち逃げした一級の印刷紙である。

「こりゃあ、印刷所としては失敗が許されませんなあ」

行進社社長の佐川大は、この男にしては珍しく目が爛々としていた。妻子を持ち、常に一家の食い扶持を稼ぐことで頭を悩ませている中年男が仕事に対して快感を伴う緊張感を持ったのは久方ぶりのことではなかったか。この頃は暁書房以外にも取引先が出来たよう、仕事にも余裕が出来てきたようだった。

九月二十四日、印刷が終了した。全二万

部の『楽園』が刷り上がった。

あまりの冊数にアパートでは管理が出来ないため、雑誌は一時的に行進社の倉庫で保管されることになった。

その後、暁書房・行進社社員全員で落丁本の検査を行なった。落丁本は一冊も見つからなかった。行進社の仕事ぶりたるや、といったところである。

「これで一先ず『楽園』は完成した。皆、今日までご苦労だった。予定通り九月二十九日から各書店に雑誌を届け、十月一日に発売となる。それまでは各自自由に過ごしてくれ。ただし北島君と坂本さんは広告と販売の最終確認をするので、明日も出勤をお願いします」

その晩は宴会だった。坂本がよく飲みに行く居酒屋の二階を貸し切り、無礼講で酒を酌み交わした。

最も下戸だったのは川上で、たった一、二杯で耳まで紅潮して柱にもたれるようにして動かなくなった。山崎と北島は見るからに上機嫌になり、守るも攻むるも黒鉄の、軍艦マーチを肩を組みながら歌い、と

くに北島は

「おい、この酒なんだか味が悪いな。バクダン(注④)飲ませようとしたわけやないやろな。俺は騙されへんで、大阪人舐めとつたらどつき回したるからな。なあ山崎さん、俺はな、思うねん。やっぱりあんたが俺にとつての親分や。大将、元帥、天皇！いや天皇は駄目や。あいつは神様やのうて人間になってしもた。人間やったら苗字つくんかいな。加藤ヒロヒト、鈴木ヒロヒト。北島ヒロヒトにしたら俺は天皇の親戚になるわけやな。おほほ、朕に酒と肴を持ってこい！朕はたらふく食うたるぞ！ギョメイギョジ」

と訳の分からないことを喋り続ける始末。普段は若い衆の目付け役である坂本は上機嫌に頷くばかりでまるで抑止力にならず、常識人の川上はすでに物も言えぬ泥酔状態で使い物にならなかった。

意外にも一等酒に強かったのは普段はおとなしい宮川静男で、北島や山崎から無理やり酒を注がれても「もったいない」と言っただけで飲み干し、その上で酒を飲ま

ない小松とともにえさきだした北島や山崎を便所まで連れていく働きぶりを見せた。

「宮川さんは酒に強いだなあ」

小松に言われると宮川は

「昔人間関係が上手く行かなくて、毎晩寝るまで酒を飲んで誤魔化していたから」と苦笑した。

宴会において最も警戒されていたのが大久保だった。酒に酔って、また意味のわからない祝詞を唱えるのではないかと心配されていた彼だったが、酒を一口飲んだ途端に喋らなくなった。若者たちが大暴れをしている中、独り正座してつまみに箸を伸ばしていた。以下、宮川の記事から抜粋。

「酒の席の大久保氏は私たちが普段目にしてる大久保氏の姿とはまるで変わってゐた。いつもの大久保さんは太鼓を叩いて経を唱えて、例の凹凸真宗の教義を誰彼構わず説いて回る。まるで彼一人が現実世界とは別の次元にあるのではないかと錯覚したが、今日の大久保さんは反対に誰とも関わらず、何か一人で思案しているやう

に見えた。あれはあれで現実から隔絶してゐるように見える」

やがて宴は幕を閉じ、アパートに戻る者はアパートへ。自分の家に帰る者は自分の家へ戻っていった。

散々酒を飲み騒いだ山崎は、小松に抱えられ三度便所で吐いたことで気分が戻ったらしく、力持ちの小松に背負われた北島とは対照的に落ち着きを取り戻していた。川上はひとりで歩けるものの、足取りは千鳥のそれだった。酔いが覚めた大久保は、力尽きた北島と川上のために「金精経」なるものを唱えている。

山崎は坂本と並んで歩いた。坂本は会社に物を取りに行くのだと言う。飲酒に慣れている坂本は懐かし、余裕の面持ちだった。「坂本さん、俺乾杯したあとの記憶がほとんど抜けているんですが、何か変なことは言っていないでしたか」

「うーん。酒に酔った君たちの言動はある程度記憶していますから、今ここで再現することもできますけど、如何がしますか？」

「やっぱりお断りしておきます。心が持た

なそうです」

「それがいいですね」

二人は笑った。

九月の暮れ。うだるような夏の夜の暑さはやわらぎ、涼しい風が通りを撫でている。空襲で出来た空き地はほとんど埋まり、新築の家が多くなっていた。

「そうそう、以前から山崎さんに訊きたかったことがあるんです」

「訊きたかったこと、ですか」

「はい。山崎さんはエロ雑誌の『ばらいそ』が好きなんですってね」

「はい。あの上海での雑誌と出会っていません。あんな雑誌があったから、俺は今晩書房の社長になっていきます」

「ほう。『ばらいそ』のどんなところが好きで？」

「読者の性欲を掻き立てるような露骨で大胆な記事や企画はもちろんですけど、その中に混ぜられている諧謔みたいなものが好きです。坂本さんは南原梅雨という人をご存じですか。『ばらいそ』の出版人なん

ですが、この人が書く文章がまあなんとも悪戯っぽくて。官憲に目を付けられているにも関わらず、却って官憲を挑発するようなことを書くんです。あのアイロニックな文章は懂れますね。ただ、俺は文才がないので真似できませんが」

「つまり、山崎さんは南原梅雨が好きなんですね。実を言うとこの出版社の求人広告を見たときから、薄々この広告を打った人間は南原梅雨の信奉者じゃないかと踏んでいました。今でも覚えています。『天才作家、天才画家、天才編集者探しています』、だったかな？ とりあえず私の予想は的中したということですね」

「坂本さんも南原梅雨のファンですか」

「いや、ファンではないですが、昔私は彼と仲良しだったんです。それで彼のことはよく知っている。だが友情を保ち続けるのは難しいですね、ずいぶん前にくだらない喧嘩をして、それから仲違いしてしまいました。でも嫌いになったわけじゃありません。彼ほど偉大で破天荒な出版人はそうそういませんよ」

坂本はまるで昔を懐かしむように言った。

（ずっと南原梅雨について気になっていたのに、最も南原梅雨を知っている人が自分の会社にいたなんて）

南原梅雨。謎に包まれた出版人。昭和戦前のエロ・グロ・ナンセンス期に猥雑誌、猥書籍を発売し、何度も発禁処分を受けた「天下の猥出版狂」。かつては出版界に名を轟かせた人物にも関わらず、戦後はさっぱりその名を聞かない。南原と親交があった井田清風でさえ、彼の消息を知らなかった。もしかしたらもうこの世にはいないかもしれない。でももしまだ生きていたら、一度会ってみたい。

「坂本さん」

「どうしました？」

「今、南原梅雨はどこにいるんでしょうね」

「会ってみたいんですか」

「ええ、ずっと憧れてきた人ですから。自分のエロ雑誌が出せることになった今、もし彼が生きているとしたら自分の仕事を一度見てみてほしいですね。南原梅雨が

『楽園』をどう評価するのか。たとえばそれが痛烈な罵倒だとしても、訊いてみたい。天下の猥出版狂に。でも、彼の消息は誰にもわかりません」

二人の後ろでは小松や大久保たちがわいわいと楽しそうにしている。いまだ動けない北島を励まそうとしているのだろう。大久保は携帯している太鼓を、てんてんと叩いている。小気味いい音だ。

「会ってみますか、南原梅雨に」

「え？」

てんてんてん、てんてんてん。

続

【注】

①松田

…松田義一。関東松田組組長で、新橋の闇市「新生マーケット」を立ち上げた。当時松田組は華僑をはじめとする外国人勢力の締め出しに取り組んでいたが、一九四六年六月に松田が舎弟に射殺されると、松田組と華僑は渋谷にて抗争状態に入った。

②月岡芳年

…江戸時代末期から明治時代中期に活躍した浮世絵師。歌川派の流れを汲みつつも、既存の浮世絵にはない残虐性を追求し、その作品は発禁処分になることもあった。昭和期に再評価が行われ、今も人気の高い画家である。代表作に「英名二十八衆句」がある。

③みかんの咲く丘

…正式名称「みかんの花咲く丘」。加藤省吾作詞、海沼實作曲。一九四六年八月二十五日に川田正子歌唱によりラジオ放送されると好評を博し、童謡としては異例の大ヒットとなった。

④バクダン

…終戦直後に出回った密造焼酎「カストリ焼酎」の中でも特に粗悪なもので、一般的に酒類に用いられるエチルアルコールではなく、工業用のメチルアルコールが混入しているものをこう呼ぶ。危険性が高く、飲むと中毒や失明、最悪の場合死に至ることもあった。